研究主題　　様式２－１

安全で，わかる・できる楽しい体育学習のあり方

大分県佐伯市立明治小学校

全校児童数	179名（男子88名　女子91名）		
全クラス数	6	教職員数	19名
体育専科教員訪問学校数			00 校
訪問校			
体育専科教員名		髙松　豪	

Plan：取組時の課題と計画

1 取組時の課題

◆前学年までの学習で，跳び箱運動に対して，否定的に捉えている児童がいる。

・怖い・痛い・どうせできない　など

○４年次では開脚跳び，６年次では台上前転をせめて，全員ができるようにしたい。

◆小学生の体格に合った跳び箱の数が少なく（２つ），十分に活動量のある授業づくりが困難である。

・中学生用の大きくて長い跳び箱は４つもある。

・マットの数が少なく，重ねマットの場をつくれない。

○全員の運動量の確保・苦手な児童が安心して練習できる場づくりをして授業を進めたい。

2 取組の計画

① 担任とのTT体制によるきめ細やかな指導と担任への助言

② 開脚跳びができない児童の取り出し指導

③ 本校にある跳び箱の有効活用

Do：実践内容

1 スモールステップの課題をクリアしてき，いつの間にか「できた」を

(1)　４年生開脚跳びの補助的な場づくり

重ねマットでつくる場（跳び箱５段程度の高さのフラットな場）を本校にある物で代用し，安全かつ具体的なめあてをもつことができるようにした

(2)　６年生台上前転の段階的な場の設置

中学生用の長い跳び箱をヘッド１段から４段まで段階的に設置し，自分のレベルにあった場を選択しながら安全に活動できるようにした

２「楽しい」活動から「もっと楽しい」活動へ

(1)　１年生「楽しい」が連続・進化する場づくり

１年生にとって楽しいと思える遊びの場の提供をして，全員が経験できるようにする。さらに，それらの場は，難しくなったり，さまざまな遊び方ができるようになったり，進化したりする。

●工夫したこと（&苦労した点）

① 能力差が顕著に表れる跳び箱運動においては，少人数指導が有効になると考える。TT としてできることを考えた際，できない児童の取り出し指導が適していると捉え，担任にもちかけた。

② 担任とのTT体制で授業をすることにより，全体指導と個別少人数指導が可能になり，苦手と感じる児童にきめ細やかな指導ができた。また，授業後に担任と相談し，振り返ることで，次時への見通しをもったり，児童の実態に合った場を考えたりすることもできた。

③ マットの数が少ない本校の状況において，重ねマットのような高さのある場をつくるのに，室内用ジャンプボードと，ある程度硬さのあるスポンジ跳び箱を使って高さを出した。また，中学生用の長い跳び箱は，台上前転の練習の場で，レベル１～４の設定（細長いマットはレベル０）に活用した。さらに，１年生跳び箱を使った運動遊びでは，手で押して進む遊び・川跳び遊びで有効活用した。

Check：取組の成果

① 「初めてできた」という児童がたくさん出た。現状まだできていない児童についても，汗をかきながら進んで練習に取り組めている。

② 児童が場の構造を理解し，自ら進んで準備・片付け・練習を行うことができてきた。

Action：今後の課題

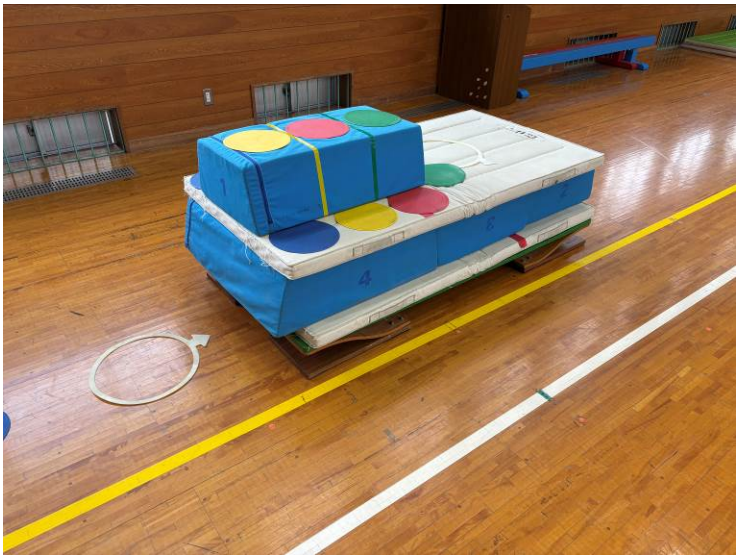
① 学年全員が技の達成をできたわけではないので，今後も支援を要する児童への易しい場の提供が必要であると同時に，技に取り組む前段階の運動遊びの必要性も出てきた。

② まずは指導する教員が，指導事項や技の特性を理解し，目の前の児童に対して，「何を」「どのように」提示していくかを熟考して指導することが必要だと感じる。

◎体力向上の取組がもたらす波及効果

今回の跳び箱を使った運動遊び・跳び箱運動においては期待できないが，同じ器械運動領域の「鉄棒を使った運動遊び」や「鉄棒運動」では，休み時間に児童が進んで練習することができるため，運動の日常化が期待できる。

様式２－１



【開脚跳びの補助的な場】　　【本校にあるものを有効活用した場】

開脚跳びでは，自分の腕から肩に重心を乗せ，跳び箱を強く突き放すことが重要になる。その際，着地に向けてさまざまな恐怖心をもつことになるが，それらを解消し，色ごとのめあてをもち一つずつ達成しながら技の完成を目指していく場となる。最後の白ケンステップに両足が入るようになれば，標準跳び箱５段程度の高さで開脚跳びができるようになっている。

【跳び箱の長さを有効活用した場】

１年生跳び箱を使った運動遊びでは，開脚跳びにつながるよう，自分の体を腕に乗せ，前に進む遊びを行った。跳び箱の先には，強く突き放しケンステップに入り，振り返って次の人とじゃんけんをする遊びも取り入れた。